



碧南ロータリークラブ週報

第2457回例会 平成21年5月27日(水)

- 会長 平岩統一郎 ● 幹事 長田 豊治 ● 会場監督 (SAA) 木村 徳雄 2008-2009年度 国際ロータリーのテーマ
- 例会日 毎週水曜日 12:30 ■ 例会場 碧南商工会議所ホール
- 事務局 碧南商工会議所内 〒447-8501 愛知県碧南市源氏神明町90
TEL <0566> 41-1100 FAX <0566> 48-1100
ホームページ: [http:// www.hekinan-rc.jp/](http://www.hekinan-rc.jp/)
E-mail: info@hekinan-rc.jp
- 会報委員 長田和徳・岡本明弘・角谷 修・黒田泰弘



● 齊 唱

ロータリーソング「ロータリー讃歌」

● 本日のメニュー

洋風弁当 とんがり帽子

● 本日のお客様

画家 斎藤吾朗 氏 (西尾市在住)



副 会 長 挨拶

皆様、こんにちは。本日、平岩会長はお仕事が多忙中ですので、お休みでございます。

お決まりの挨拶の冒頭に、不況とインフルエンザといろいろありますが、先日は北朝鮮が核実験を行い、また、ミサイルの研究を行っているようです。せんだって、田母神前空幕長のお話を聞く機会がございましたが、その中で「一発の核ミサイルは、百発の核ミサイルを抑止する。」という言葉だけが私の頭の中に残っています。一発持っていれば、百発も持っているのも抑止できるということで、この理論でいくと、何か強いものをひとつ持っていなければ、生き抜いていけない。また、人間関係という、相手の弱みを一つ握っていると、最後には、その弱みを出すぞという手法と似ています。



鈴木昭洋副会長

私も、副会長という役職を受け、終わろうとしていますが。先日、事業報告書を書きました。一年間の報告を完璧に短い文章で書くのは容易ではありませんでした。その中で私が、一つだけ心残りなのは、平岩会長が50周年に向けて華々しいスタートを切られ、式典も終わられましたが、私は、「何かあった時には、会長の代わりに泥をかぶる」覚悟でいましたが、その式典時だけ体調を崩し、入院してしまいました。その事が、大変心残りになっております。

副会長の役割は、会長の補佐ということで「自分の独自の意見を述べてはいけない」と思っています。先日、平岩会長のお話のなかで、「礼に耐え、苦に耐え、煩に耐え、閑に耐え、激に耐え、躁がず、競わず、随わず、もって大事を成すべし」と安岡正篤氏の事を言われました。私も少し覚えがありまして、家に帰り調べてみました。安岡正篤氏は、戦前戦後を通じ活躍された哲学者であり、陽明学者であり、東洋の思想家でありました。また、国内では、あの2・26事件を煽った人ではないかと言われていました。それと、テレビ等に出演されています細木数子氏とも出会っていたから、今日があると思います。

会長が言われた事を少し補足(補佐)しまして、挨拶に代えさせていただきます。

幹事報告

- 他クラブの例会変更等は別紙幹事報告の通りです。
- 国際ロータリー第2760地区 2009～2010年度地区大会実行委員会事務局の開設のお知らせが届いております。別紙幹事報告の通りです。



長田豊治幹事

委員会報告

〈出席奨励委員会〉

総会員数78名(内出席免除者14名の内出席者9名)出席者60名

出席対象者 60/78名	出席率 83.33%
欠席者18名(病欠者1名)	前々回修正出席率 100%

※三週連続出席率100%の場合は記念品を差し上げます。

〈ニコボックス委員会〉

山田 純嗣君 4月29日「多年司法書士としてよく職務に精励したとして」黄綬褒章の荣誉に浴し、5月19日法務省にて大臣より受章の伝達式が行われた後、皇居〔豊明殿〕にて天皇陛下に拝謁することができました。これは偏に50余年に渡り皆様のご指導の賜と考えております。今回の受章に際し、碧南ロータリークラブ平岩会長様はじめ皆様よりのお祝意に対し、厚く感謝申し上げます。

長田 銑司君 斎藤吾朗さん、今日は卓話ありがとうございます。

杉浦 昌裕君 良いことへのきざしがありました。

岡本 明弘君 お陰様で会社が50年を迎えました。多くの皆様にお世話になりました。心より感謝申し上げます。

今年も一つ上がりました。

卓話

「モナ・リザと三河の風土」

画家 斎藤 吾朗 氏 (独立美術協会会員)

1947年 愛知県西尾市に生まれる。

1971年 多摩美術大学大学院美術研究科を修了。

1973年 ルーヴル美術館にて日本人として初めて(モナ・リザ)を模写。

1974年 第18回シェル美術賞展で2等受賞。

1975年 第43回独立展で独立賞および海老原賞を受賞。

1977年 国際ナイーヴ美術館(ユーゴスラビア)に日本代表として出品。

1987年 アメリカ個展婦国報告展(名古屋・丸栄美術画廊)以降隔年。

1988年 愛知県芸術選奨文化賞を受賞。

1998年 「モナ・リザ」から赤絵「風土記」斎藤吾朗の世界展(伊東・池田20世紀美術館)。

2002年 ニューヨーク・グランドゼロ路上展実行委員長。

2005年 ルーヴル美術館休館日貸切りツアー。



こんにちは、斎藤吾朗です。

敗戦直後の何もない日本に生まれた私は絵を描くことが一番の楽しみでした。壁や障子など家中に落書をしていました。いつもそれを見て、褒めてくれる母の笑顔を見ているうちに絵描きになろうと思った。

当時、絵描きになるには東京の美術大学で学んでからパリに留学するのが一番だと言われていました。大学院を出ても、パリへの渡航費用が高く(ドルが高く)、費用が無いために、地元の

高校で講師を務めていました。2年後、26歳でやっとでパリに渡ることができました。

渡航後、1年で資金が底をつき、せめて日本で待っている母への土産としてモナ・リザを模写して帰ろうと思いました。美術館の受付で、お願いしましたが、私のフランス語がおかしかったのか、大笑いをされてしまいました。悔しくなって、座り込んで辞書を見ながらひたすら頼み込み、その必死さが通じたのか、1973年12月に好運にも日本人として初めてモナ・リザを公認模写をする許可を頂きました。

模写しながら、モナ・リザはレオナルドにとっては母親のイメージ、背景の山脈は故郷ヴィンチ村の風景と気付き、自分も故里の風物や人々を描くべきと悟りました。

模写したモナ・リザを土産に母へ贈ったら、近所の人に回覧するほど喜んでいました。その様子を版画にしたところ、好運にもルーヴル美術館のロワレット館長の収蔵品になりました。その館長のおかげで国賓同様の扱いでルーヴル美術館を見学できるようになりました。36年経った今もルーヴル美術館との御縁は続き、今年も二年ぶり、三回目のルーヴル美術館貸切りツアーを4月19日に出発し、21日の火曜休館日の早朝に私達30名のみで入場いたしました。特別な計らいでメインダイニングで朝食を頂いてから、ミロのヴィーナス、サモトラケのニケ、ナポレオン戴冠式などの名作群をじっくり鑑賞しました。モナ・リザの前では全員で記念撮影もし、何人かは本物の前で鉛筆模写もしてしまいました。二時間半で、ほとんどの名作を見て回りました、万歩計は1万8千歩を記録していた。

午後はセヌ河対岸にあるオルセー美術館に希望者を案内し。ゴッホ、ゴーギャン、モネ、ドガ、ロートレックなど印象派の作品が網羅されている。この美術館にも私の版画が資料として二点収蔵されている。こちらは開館日だったので、雑踏の中で観賞し、疲れはててしまった。

翌日からはTGV（新幹線）でアヴィニョンにでかけた。十四世紀のローマ法王庁宮殿からは、歌で有名なアヴィニョンの橋が美しく伸びている。ニームの紀元前の水道橋ボンデユカールの275mを渡ってから円形闘技場などのあるローマ時代の古都アルルに着きました。ゴッホとゴーギャンが共同生活した黄色い家のあった町でもあり、跳ね橋やカフェ、庭園などゴッホが描いた風景が残されており、一同大感激。耳切り事件の後、入院したサン・レミの病院記念室にも立ち寄り、ゴッホの足跡を身近に感じることができた。

エクス・アン・プロヴァンスではセザンヌのアトリエを見学し、連作のサント・ヴィクトワール山を眺望しました。ニースではシャガール美術館、マチス美術館なども見学し、鷲の巣材の一つ断崖上のエズ村やモナコにも足を伸ばし、美術好きの人々には贅沢三昧の旅になりました。

絵という字は糸に会うと書く。色々な糸を会わせるのが絵描きの使命と考えています。厳しい時節ですが、こうした時にこそ「三河発のメッセージ活動」を通し、社会を明るく、活性化の礎となればと強く意識して活動を行っていきます。



次回例会案内 平成21年6月10日（水）
クラブフォーラム「自動車産業の行方」
法政大学大学院政策創造研究科教授 坂本光司氏